

版本画像情報の授業活用とその研究

ー文学と科学の融合をめざしてー

赤松万里*, 石内久次**, 上田 尚***, 山下尚位***
三橋由美***, 森まどか***, 石原信行***, 船井春奈***

本研究は、日本の“古典籍資料における画像情報”を、広く教育に有効活用するための研究課題の一つである。具体的には、エコノグラフィ研究としての名所図会研究等の成果を画像情報として用い、小学校、中学校、高等学校、外国人日本語学習者等を対象に展開する授業を構築するとともに、文学と科学の融合という課題を提起する。

〔キーワード：画像処理、近世文学、版本、阿波名所図会、文学と科学、彩色、学校教育、日本語教育〕

1 科学における文学、その授業構想について

赤松万里

本研究は、日本の“古典籍資料における画像情報”を、広く教育に有効活用するための研究課題の一つである。

“古典籍資料における画像情報”の範囲については、基本的には、14世紀から、明治初期の19世紀に至るまでの約600年にわたる、通時的な日本文化の営みにおいて、画像として表現されたすべての資料を対象とするが、本研究では、その範囲を江戸時代に出版された版本に限定し、主として『阿波名所図会』を用いる。授業設計の対象としては、学校教育・社会教育・生涯教育など教育全般を想定するが、本研究においては、小学校、中学校、高等学校、外国人日本語学習者等を対象にする。

名所図会研究は、エコノグラフィ研究の一環として研究が活発化しつつある研究領域の一つである。従来のエコノグラフィ研究は思想的政治的側面からの研究がほとんどであったが、執筆者等においては、出版学・情報流通論をベースにして、文学研究における名所図会研究と連動させる研究課題の一つとして取り組んできた。構築した名所図会データベースを用いて、文化論的手法により解析する研究を進めているところである。そこから浮かび上がる課題として、たとえば、江戸時代後期文学が内包する情報循環型社会と名所図会挿画との文学的な相関関係なども指摘できよう。

一方これらの研究領域の成果は学校教育等においてどれほど活用されているのだろうか。結論から言うとそれらはほとんど活用されていないといわなければならない。日本の古典籍は膨大な蓄積を持ち、それらの画像研

究は、日本文化研究の一環として、着実に国内外ともに研究が進展しつつある。

この領域の学校教育における活用の可能性としては科学教育の範疇においても有効である。たとえば高等学校において文部科学省が現在推進している科学教育推進のためのスーパーサイエンスハイスクールの指定における教育課程の研究開発、教科内容や指導方法の研究において、文系領域からの開発・参加が可能となり、主として理系領域のみに陥りがちなアンバランスを是正するのに役立つものである。一つの具体例をあげると、「奈良県立奈良高等学校平成17年度スーパーサイエンスハイスクール生徒研究発表会」（平成18年2月10日、於：奈良県文化会館国際ホール）において16課題の発表中3課題は歴史学に関する発表という斬新さがみられた。これは科学技術立国の名に相応のバランスの取れた、学校教育における科学へのアプローチといえるのではないだろうか。たとえば本研究課題のような研究が位置づけられるとするならば、文学領域の参加が可能となるであろう。本研究では、6つのテーマにより“古典籍資料における画像情報”を用いた授業設計を考察した。共通することは『阿波名所図会』等を用いて事前にデジタルの彩色を行うことである。

デジタルの彩色は、導入の意味で必ず実施する。これには一定の準備作業が必要とされるので「2 彩色方法について」を参照されたい。以下に本学大学院における授業（近世文学演習Ⅱ）に関連した実習から6つの課題の授業計画を掲げる。

* 鳴門教育大学言語系（国語）教育講座
** 鳴門教育大学高度情報研究教育センター
*** 鳴門教育大学大学院学校教育研究科教科・領域教育専攻言語系コース（国語）

2 彩色方法について

石内久次

彩色方法の説明には、レイヤー機能を持つ画像処理用アプリケーションソフトウェアである Adobe Photoshop 6.0 を利用した。また、Adobe Photoshop Elements についても、同様の彩色作業が行えるように、補足的な説明を行う。

彩色の際の操作については、基本的にマウスでの利用を前提にしたが、筆圧感応式タブレットでの利用についても、部分的に説明を加える。

彩色作業手順としては、主に図1の流れで行う。まず、図2の『阿波名所図会』中の「五百羅漢」の丁の裏と表について、イメージスキャナを利用して、画像ファイルとして取り込みを行う(1)。

次に、取り込んだ図2の原画をモノクロ二階調化(2)した後、中央部分の枠線の消去し、左右の画像が自然に見える位置で、図3のように、画像の連結を行う(3)。さらに、図4のように、図3の画像を挟むようにして、前景と背景に彩色用レイヤーを追加する(4)。その際に、挟

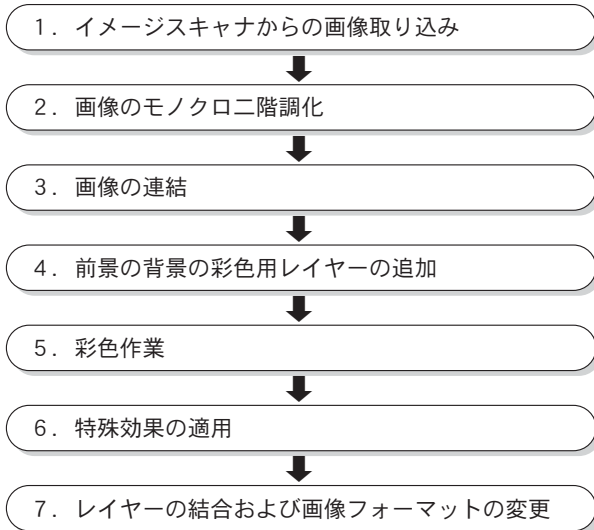


図1 彩色作業手順

んだ図3の画像で墨の版部分ではない白色の領域を透明化し、背景の部分を通けるようにする。

彩色については、前景と背景の彩色用レイヤーに対して行う。基本的に、人物、建物、風景などに対しては、背景の彩色用レイヤーを塗り、輪郭の墨の版部分を際立たせる。墨の版部分で、輪郭ではない一部の黒色が濃い部分については、前景に対して黒色以外の彩色を行う(5)。彩色が完了したら、彩色用レイヤーに対して「ぼかし」などの特殊効果を適用する(6)。

最後に、彩色用レイヤーも含めて、1つのレイヤーに結合してまとめ、印刷などの用途に合わせて画像フォーマットを変更して保存する(7)。図5は、完成した「五百羅漢」の彩色例である。



図2 『阿波名所図会』中の「五百羅漢」の原画



図3 「五百羅漢」のモノクロ二階調化した連結画像

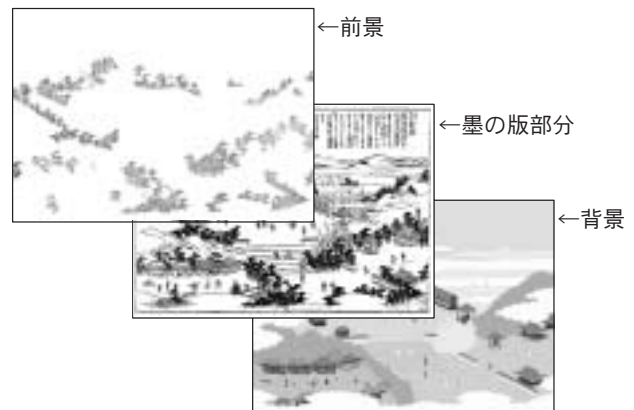


図4 「五百羅漢」の彩色用レイヤーの構成



図5 「五百羅漢」の彩色例

3 『阿波名所図会』の学習 ーコンピュータを活用してー

上田 尚

中学校選択国語科授業計画：週1時間（年間35時間）

基本的な考え方

中学校における選択授業については、総合的な学習の時間と同様に、その必要性については、学校現場において、意見の分かれるところである。

しかし、生徒の自主的な授業科目の選択によって意欲を引き出し、深く、発展的な学習を促すという選択教科開設の理念は貴重である。その際、コンピュータを活用した『阿波名所図会』の学習は有効な方法の一つである。

一方、中学校国語科においては、コンピュータが十分に活用されているとは言えない。最も取り入れやすいのがインターネットを利用した検索、プレゼンテーションの一方法としてのコンピュータの活用であろう。これに加えて、出版物における挿画（挿絵）に関してコンピュータを活用したアプローチが可能ではないだろうか。

国語科の授業はともすれば文字情報のみに重点が置かれがちである。挿画（挿絵）等による視覚的効果が作品鑑賞において大きな役割を果たす場合があることを、コンピュータによる彩色という作業から生徒に再認識させたい。さらには、「絵入りの本」は子ども向けのレベルの低い本であるという、教師、生徒がともに陥りやすい固定的な概念からの脱却も視野に入れることができるのではないか。

上記のような点から、国語科の選択授業において『阿波名所図会』を用いて、次のような授業展開が可能である。なお、挿画の取り扱いについては1つの挿画をクラス全体で取り上げる、30の挿画の中から自分の好きなものを自由に選ぶ、数人のグループで1つの挿画を取り上げる等、さまざまな方法が考えられるが、ここでは「眉山」を共通の挿画とした授業を構想した。

目標

- ・郷土の文化、地理に関心を持つ。
- ・コンピュータの活用方法を学ぶ。
- ・江戸時代の風俗を知ることによって古典の時代背景について理解を深める。
- ・名所図会の文学性について学ぶ。

年間計画

- 1 『阿波名所図会』について……………2時間
- 2 挿画について……………2時間
- 3 コンピュータを用いた彩色……………23時間
 - ・利用ソフトの習熟……………2時間
 - ・時代考証……………1時間
 - ・彩色部分の選択・分担……………1時間

- ・彩色作業……………15時間
- ・作品発表会……………1時間
- ・問題点の検討……………1時間
- ・修正……………2時間

- 4 文字部分の学習……………2時間
- 5 名所の現在について 実地調査……………6時間

授業を進める上での留意点

- 1 『阿波名所図会』について……全国各地の名所図会が刊行された経緯、意義、『阿波名所図会』の特徴など、概要を理解させる。
- 2 挿画について……30の挿画を概観し、今回の課題として「眉山」を指定する。「眉山」は徳島市のシンボルであると同時に県民全体から親しまれている山である。また「大滝山持妙院」「眺望」と関連させ発展的学習が期待できる。年間計画5の実地調査も容易である。
- 3 コンピュータを用いた彩色……コンピュータ、ソフトウェア（Adobe Photoshop 等）を生徒の人数分確保したい。2～4名程度のグループを作りモチーフごとに分担させ重ね合わせるという方法も可能であろう。スピード、技術において個人差が大きいことが予想され、仕上がり具合を見て分量を変えるなど指導に工夫が必要である。また、名所図会における人物の重要性を考慮し、人物によって「眉山」に描きこまれたストーリーを想像させたい。一つの作品として完成させ、展示するのが望ましい。
- 4 文字部分の学習……9行の解説と、万葉集の和歌が書かれている。和歌の鑑賞、「徳島を詠んだ和歌」の学習への発展も期待できる。
- 5 名所の現在について 実地調査……彩色した「眉山」と併せて「大滝山持妙院」「眺望」を手に江戸と現代の徳島の姿を比較させたい。丁寧な彩色作業のあとで、生徒は、江戸時代の日本の都市の調和の取れた美しさ、現代の日本が失った風景を十分に感じ取ることが可能ではないだろうか。



図6 『阿波名所図会』中の「眉山」

4 『阿波名所図会』 着色実習と授業展開への考察

山下尚位

『阿波名所図会』の画面を画像データとして情報処理し、ペイントソフトによって着色を施すという実習を行った。この実習を通じて得られた知識と技術について整理し、授業実践への応用の可能性を考察したい。

1 画像について

今回私が担当したのは「鳴門真景」である。

「鳴門真景」の着色作業を通じて解ったことは次の通りである。

「鳴門真景」の特徴

- ・ 鳴門側から渦を挟んで淡路島を望む構図であること
- ・ 中央に丸く大きな渦が二つ配置されていること
- ・ 左側（瀬戸内海）と右側（紀伊水道）の海が静と動の対照を成して描かれていること
- ・ 鳴門側の陸地の茶屋に見物人9名とそこに到る途次の旅人が2名描かれていること
- ・ 瀬戸内側に大きめの帆船2艘と紀伊水道側の遠景に小さな帆船8艘が描かれていること

景勝地を描いた図にこの土地の情報を盛り込む方法はいくつか考えられる。渦潮を中心とした雄大な自然を取り込みつつ、様々な要素を織り込んで配置するとすると、ここで見られるように、高い視線から俯瞰する構図が一般的であるといえよう。

「鳴門真景」はこうした一般的な軌範を踏まえつつ、土地の風物を意図的にちりばめて、たくさんの情報を含ませた味わい深い図であるといえる。

2 着色実習について

この図の第一印象は「線の多い、雑然とした画面だと感じた。荒々しい波と渦潮の感じは良く表現されている。」というものであった。

しかし、画像に着色するという目的で作業を始めると、見落としていた数々の事項に気付くこととなった。まず人物である。海を塗ろうとした時、波間に舟の乗った人物を2名発見した。荒々しい波の描線に紛れて、最初は気付かなかったものである。「わかめ取り」の漁師である。危うく海の青で塗りつぶすところであった。

また、陸地部分の着色の際に、茶屋前の展望台で見物する人物を発見した。一番手前に書いてあるので、気付いてはいたのだが、よく見ると9人それぞれの立ち居や振る舞いが細かく描かれている。

その他、潮目の波の動きの繊細さや遠景の奥行き等、細部に渡る細工の跡を追うことができた。

今回使用した「鳴門真景」においては、構図の関係上、画面全体の縦の長さに対して人物の背丈の比は、約14対1の割合である。画面の複雑な線に紛れて見落としてしまいがちになるのも無理はない。それが、着色作業を画面

に限無く行うことで、見落としを防ぐことができる。

こういった観察ができたのは、着色作業を通じたからこそであって、通り一遍の鑑賞では至りがたい境地であると思われる。

3 授業展開についての考察

こうした体験を何らかの授業形態をとって、学習者にも追わせることは有意義なことではないだろうか。

今回の着色作業を通じて得られた利点としては、次のことがあげられる。

- ・ 画面の細部までつぶさに観察することが、新たな発見を生むこと
- ・ 作業に無理なく向かわせる点で、ペイントソフトは興味関心を引くことや作業の手軽さにおいて、有効であること

また、技術的なこととして、「レイヤー機能」を使うことで、描線と着色面を別個に保存することができ、その重ねを任意で抽出して組み合わせられることを体験した。

このことは「人物」「船」「遠景」「近景」等のテーマごとに着色作業が行えることでもあり、使い方次第で幅広い応用が可能であることが解った。

4 授業実践での応用の可能性

では、画像から情報を読み取ることは、学習活動のどのような場面で効用を発揮するのだろうか。

まず、国語科において考えてみよう。

文字情報を具体的な像に結びつける能力を培う上で文学教材は力を発揮する。文学を読み味わう時に、時代背景や当時の風俗を知ることは、その理解を助け鑑賞を深める上で重要なことである。今回の作業はこうした要求に十分に応えることができる内容を含んでいる。今回使用した「名所図会」の数々の他にも、「仮名草紙」等の挿絵に描かれている画像には当時の風俗や風物がかなり細かく描き込まれている。こういった情報を読み取る体験は、文学鑑賞の幅を広げる上で有効である。

今回の着色実習は、今後の授業展開に様々な可能性を見出すきっかけとなる有意義なものであった。



図7 『阿波名所図会』中の「鳴門真景」

5 総合的な学習の時間における『阿波名所図会』の活用 三橋由美

1 教材としての『阿波名所図会』

『阿波名所図会』には、徳島県内の主立った名所が載せられている。現在も観光地として賑わっている所もあるが、時代とともに地元の住民にさえ忘れられつつある所も多い。しかし、地域の教材として総合的な学習の時間に活用することによって、子どもたちに地域の歴史や文化に興味をもたせるきっかけとすることもできるのではないだろうか。

また、『阿波名所図会』は、国語科（本文・和歌）はもとより、社会科（地理的・歴史的背景）、美術科（版画）、家庭科（風俗）とも関連した内容を含むものである。さらにパソコンで彩色することによって技術科の領域とも重なることになる。学習を深めていく上でそれぞれの教科で身に付けた知識や技能を生かすという、まさに総合的な学習の時間に格好の教材であるといえる。

2 『阿波名所図会』による総合的な学習の時間が目指すもの

第1に、「地域を知る」ことである。総合的な学習の時間に施設を訪ねたり、地域の人にインタビューしたりという活動はさかに行われている。このような方法は、現在の地域を知るためには、効果的で必要不可欠なものである。しかし、一歩踏み込んで地域の歴史や文化を理解し、より深く「地域を知る」ためには、『阿波名所図会』のような教材が必要になってくる。

第2に、歴史や文化に触れることによって、自分たちの住む地域を愛し、地域に誇りをもって生活できるようにすることである。地域の中で自分はどのように生きるのか。よりよい生き方を考えるきっかけとしたい。

3 学習の方法・計画〈例〉

- ①オリエンテーション（学習の全体計画） … 1時間
- ②『阿波名所図会』の概要を説明する。 … 1時間
- ③班（3～4人程度）で、自分たちが担当する名所を決める。他の班と重複しないように調整する。 … 1時間
- ④班ごとに名所の研究をする（本文の解説・現代語訳、参考文献の調査、現地調査など）。名所図会に載せられている内容だけでなく、関連するものや現在の様子、江戸時代と現代の共通点・相違点などにも目を向けさせたい。研究の成果は、パソコンで彩色した『阿波名所図会』とともに製本する。 … 8時間
- ⑤『阿波名所図会』（版本のコピー）に彩色する。〈下絵〉 … 2時間
- ⑥下絵を基にパソコンによる彩色を行う。 … 15時間
- ⑦パソコンで彩色した『阿波名所図会』を製本する。

研究のまとめや現代版ガイドとしての案内なども載せる。 … 2時間

⑧学習のまとめ・反省（作品発表） … 2時間

津乃峰山上からは、「阿波の松島」ともいわれる橘湾を一望することができる。風光明媚な景勝地であるが、現在は埋め立てられ、発電所や道路が目につく。自然の美しさと同時に、社会の近代化がもたらした変化を目の当たりにし、地域の歴史や将来像、生活や生き方にまで目を向けさせることができる好例である。挿絵は細かいので彩色にはかなりの技能と時間を要する。



図8 『阿波名所図会』中の「津峰の眺望」

4 予想される問題点

①現地調査

『阿波名所図会』による総合的な学習は、現地調査が重要になってくる。掲載されている名所は広域にわたっており、必ずしも現地調査が可能な状況にあるとは限らない。実際に現地調査ができた子どもたちとできなかった子どもたちとでは、学習意欲や成果に大きな差が顕れることも考えられる。

②学習環境の整備

パソコンの機能が充実していること、そして指導者がパソコンの技能に習熟していることが前提である。また、挿絵だけでなく本文の理解も必要であり、中学生にとってはやや難易度の高い内容も含まれている。したがって、参考となる資料の整備も不可欠である。

③時間の調整

挿絵は、比較的構成が単純なものからかなり複雑なものまで様々である。そのため、彩色するのに要する時間にもかなりの差が顕れると考えられる。授業時間外の学習や指導が必要になってくるが、部活動や塾で忙しい中学生が多く、時間の確保が難しい。

6 外国人日本語学習者に対する『阿波名所図会』の 活用法

森まどか

ここで少し目を転じて、日本人ではなく日本語を学習している外国人を対象とした『阿波名所図会』の活用法について考える。外国人に日本語を教える際には、単に日本語という語学のみを教えればいいわけではない。日本の生活様式や日本人の考え方など、日本の文化を理解してもらわなければ真の日本語を身に付けることはできない。そのため、日本語教師にとって日本の文化を教えることは重要であるが、どのように教えればいいのかは常に悩む問題でもある。日本の文化、つまり日本事情を教える教材は未だ充実しているとは言えず、市販教材は中・上級レベルに偏っている感がある。また、教材は現代の日本文化に焦点を当てたものが大半であり、近代以前の日本文化はほとんど教えられていない。つまり、初級レベルの学習者に近代以前の日本文化を教えるということは今まで議論すらされてこなかったと言える。しかし、初級レベルの段階で日本の近代文化を教えることは現代と近代の日本の違いを正しく理解することにつながり、また日本語学習の動機付けにもなる。そのように近代の日本文化を教えることには十分な意味が見出されるが、教材がないのが現状である。だが、『阿波名所図会』などを効果的に使用すれば、初級レベルの学習者に対して近代の日本文化を教えることが可能である。

本稿では、日本人の「衣」と切り離せない「着物」を題材として取り上げる。まず、日本事情を扱うテキストの中で、「着物」がどのように取り上げられているのかを調べた。初級後半レベルの学習者向けの教材¹では、「日本人は昔は『着物（和服）』を着ていましたが、明治時代（1868～1912）のはじめごろから洋服も着るようになりました。第二次世界大戦（1939～1945）が終わってからは、ほとんど洋服になりました。今では、着物は正月や結婚式のときなど、ときどき着るようになりました。」と、「着物」の概観を述べるにとどまっている。一方、中・上級レベル²では「日本では伝統的な衣装を着物と総称している。ただ、外国で有名なのは華やかな色彩とデザインで幅の広い帯を締めて着る女性の着物である。着物は高価である上に活発な行動には向かないため、日常生活ではほとんど洋服を着るようになった。しかし、結婚式・葬式・卒業式・成人式などのフォーマルな場では、着物を着る人も多い。そのほかは、芸者とか日本的な料亭で働く女性などが常用するくらいで、普通、街で

はほとんど見られない（後略）。」のように、着物に対する説明は詳しくなるが、着物を見る機会が少ない海外在住の学習者にとって、この文章が「着物」というイメージを浮かび上がらせるに充分であるとは思えない。『阿波名所図会』などの絵を用いた視覚的な導入が必要である。

実施する機関により、どのくらいの時間を割くことができるのかは千差万別であるが、導入する時期としてはある程度日本に関する知識を持った初級後半以降が良いだろう。1枚の絵を全て塗り終えるには相当の時間がかかるため、教師が『阿波名所図会』の人物画を一部切り取って準備しておくに進めやすい。実施する国にもよるが、パソコンが使える環境にあれば、パソコンで動かすことができるようパソコンに取り込んでおく。パソコンが使用できなければ、紙の印刷で特に問題はない。

授業で色塗りを指導していく際は、まず『阿波名所図会』が今から約200年前に描かれた日本の絵であることを簡単に説明する。時間があれば、200年前の学習者の国がどのような様子であったのか、人々はどのような衣服を身に付けていたのかなどを発表させると、彩色作業により親近感が持てるだろう。その後、各自で日本の風俗を想像し、パソコンあるいは色鉛筆で彩色するように促す。絵が完成すれば、同じ絵を彩色した学習者でグループを組ませ、各自の絵を比較し、彩色した絵が何をしている絵であるのか、また彩色した色に問題はないのかなどを議論してもらう。その後、グループごとに話し合ったことを発表し、教師は絵の人物が何を身に付けているのかを説明したり、実際に色を付けてある『阿波名所図会』を示すなどして、江戸時代の日本文化の説明を行う。

以上の活動だけでは、教えられる内容に限界がある。しかし、日本の文化、特に普段接することのない江戸時代の文化に対して考える時間を持つことは、日本の文化理解に大きく貢献するであろう。これを契機に、日本の文化理解、ひいては日本語学習の動機付けの向上につなげていきたい。



図9 『阿波名所図会』中の「天馬石」より一部抜粋

¹ 福岡日本語センター「日本事情」プロジェクト（1997）「話そう考えよう初級日本事情」スリーエーネットワーク

² 板坂元（1992）「日本語で学ぶ日本事情●中級から上級へ日本を知る[改訂版]—その暮らし365日—」スリーエーネットワーク

7 中学校3年間を見通した『小倉百人一首』指導の構想 —『百人一首一夕話』をもとに—

石原信行

1. 単元設定の理由

最近、小学校での英語教育が話題をよんでいる。様々な議論が行われているが、政治・経済・環境などの面から考えても、日本にとどまることなく、地球規模で考えなければならなくなってきた現在、これからの21世紀を担う若者たちが英語を学ぶことは有意義であり、大いに歓迎すべきことではないかと考える。そして、このことは母国語である日本語をおざなりにしてよいということではなく、むしろその役割と意義が一層問われることになってきたと考えられる。母国語学習として、言葉をコミュニケーションといった言語機能の面から学ぶことはもちろんのこと、文化の面からも学ぶ必要がある。特に短歌・俳句・詩といったアンソロジーに親しむことは、日本語の特有の語感や、心情にふれることである。そして、言葉を文化としてとらえる尊重するしようとする意識は、単に母国語愛に終始するに留まることなく、他国の言葉文化を尊重する姿勢にもつながるはずである。

『小倉百人一首』はカルタ遊びとして長く我が国で親しまれてきた。『小倉百人一首』は、鎌倉時代初期、藤原定家が、宇都宮入道蓮生の依頼により、『古今和歌集』や『拾遺和歌集』などの勅撰和歌集から百人の歌人を選び、一首ずつ選出して完成させたものである。後世、カルタと結びつき遊戯となったというが、そもそも中世を代表する歌人である藤原定家の秀歌選である。古語はもちろんのこと、和歌の修辞法など中学生には難しい面もあるが、細かな解釈よりも、音読、暗誦を導入とし、アンソロジーづくりなど鑑賞学習を行うことにより、四季の風物や、恋愛についてより身近なものとして考えることができるはずである。また、和歌の作者について調べる研究学習は、古典の世界に親しむ機会となるはずである。本単元は、3年間をとおした帯単元として、各学年5時間、3年間で計15時間で計画した。なお、学校行事として毎年1月に百人一首大会を行うとして計画した。

2. 学習内容

本単元は帯単元として3年間にわたり学習を行うこととした。これは継続して行うことによって、学習者に『小倉百人一首』に親しみをもたせるとともに、短歌によまれた言葉に対する意識が深まると考えたからである。1年生は、主に音読、暗誦、視写を行い、歴史的仮名遣いに留意しながら、言葉の響きを味わう。そして、『小倉百人一首』によまれた四季の風景をテーマに、季節をあらわす言葉に注意してアンソロジーづくりを行うなど鑑賞活動を行う。2年生では、ひきつづき、音読、暗

誦、視写を行うとともに、『小倉百人一首』によまれた恋の心」をテーマに鑑賞活動を行う。思春期を迎える学習者にとっては興味深いテーマとなるのではないか。そして、3年生では研究学習として、作者の世界について調べ学習を行い、古典世界についての知識を学ぶ。その際、図書館の資料、インターネットによる検索を行わせたい。

また、古典に描かれた世界のイメージをもたせるため、『百人一首一夕話』の挿絵を活用したい。『百人一首一夕話』は、江戸時代後期、尾崎雅嘉が著した『小倉百人一首』の注釈書である。一首一首の評釈と、作者一人一人のエピソードについても面白く書かれている。文語調であるため、文をそのまま中学生にあたえるのは難しいが、口語訳や傍注資料をつけることで親しみをもたせたい。挿絵は作者の世界を知る上で有効な手がかりとなるはずである。鑑賞学習の延長として、挿絵に彩色をほどこし場面を紹介するといった授業も構想できる。

以下は、各学年ごとの学習テーマ、学習活動、学習事項を一覧表にしたものである。

表1 各学年ごとの学習テーマ、学習活動、学習事項

	学習テーマ	学習活動	学習事項
1 学年	○ 季節の歌に「四季」を学ぶ。 ・『小倉百人一首』によまれた四季の風景	・ 視写・鑑賞 ・ アンソロジーづくり ・ カルタ取り (百人一首大会)	・ 歴史的仮名遣い ・ 季節をあらわす言葉
2 学年	○ 恋の歌にさまざまな「恋の心」を読む。 ・『小倉百人一首』によまれた恋の心・音読・暗誦	・ 音読・暗誦 ・ 視写・鑑賞 ・ アンソロジーづくり ・ カルタ取り (百人一首大会)	・ 和歌の修辞法 (句切れ体言止め・倒置法)
3 学年	○ 作者の世界を読み取ろう。 ・『百人一首一夕話』の世界を楽しもう。	・ 音読・暗誦 ・ 作者研究 ・ 挿絵 (彩色) を用いた作者のエピソード紹介 ・ カルタ取り (百人一首大会)	・ 和歌の修辞法 (枕詞・掛詞・序詞・縁語)



図10 『百人一首一夕話』
尾崎雅嘉 古川久校訂 岩波文庫

8 「藍玉」の図を活用した授業 ー『阿波名所図会』を資料としてー

船井春奈

毎年、徳島県板野郡松茂町内の小学校に通う児童たちは、卒業記念に藍染の体験実習を行う。その授業の枠組みは、各小学校の事情に任されているものの総合学習的な意味合いを含んでいることが多い。そこで、同実習に伴う事前授業の一環として「藍玉」の図(複写およびそれに著者が色塗りを施したもの)を参照し、その図の読み取りを一つの授業案として提案する。

1 着物

1) 色彩 この図会に描かれている人物像から、当時の衣服である着物や脚絆、履物、持物から、職業や身分に違いがあることを発見させる。

なお、色彩化した方のこれらの着物には、藍・紅花・麩(きはだ)・柿渋・橡(つるばみ)を染料にしたと想定して色塗りを施している。そこで、聖徳太子が冠位十二階で身分を色によって分類したように、この時代にも色で身分の分別ができていたことを伝える。

また、同じように歴史の復習を兼ねつつ、文化や技術が伝わってきたのは中国であったことを述べる。身分の色別は中国に倣ったものである。そして、学習者たちがこれから実習することになる染め物も、そのうちの一つである。染色技術だけでなく、藍や紅など馴染みのある染料も同時に伝わってきた。

2) 藍の使われ方 江戸時代以前、藍の色は、公家などが使うことのできる高貴な色とされていた。しかし、江戸時代になると、庶民も使用可能になった。

古来より、日本の庶民は、夏は涼しいが、冬は寒い麻布を着用していた。だが、江戸時代中期頃になると、木綿が広く栽培されるようになり、木綿を着用することが可能になった。その木綿をさらに強い素材に成し得たのが、藍である。藍で染色した木綿は、こうして庶民たちの作業着として発達し、市民権を得たのだ。同時に、一般庶民も藍の色を使用できるようになったのである。

藍は、世界における人類最初の染料と言われている。生葉のうちから染色することができるため、原始人は顔面や皮膚等に塗り、魔除けや虫除けの役割を果たした。藍は、そのような特有の強さでもって人々に受け入れられ、広く愛用されたのである。その藍の苗が育つのに適した地こそが、徳島の吉野川流域であった。

ところで、当事の色彩は、染料を混合することによって作り出されていた。例えば、麩(黄色)と藍(青)で緑色に、紅花(赤)と藍(青)で二藍(紫)という色の組み合わせ方がある。出来上がったこの二つの色は、それぞれ身分の高い人たちが使用していた。いず

れにも庶民が着用している藍が混入されている。だが、他の色彩を混合することでもって庶民の色と区別されていた。

2 藍玉

1) 藍玉 この図の主題は「藍玉」である。それは、染料としての藍を全国に出荷する時の形態である。だが、今日、藍師たちはもはや藍玉を製法していない。その前の段階の染の状態の出荷している。そこで、児童たちに「藍玉」の図を見せ、これが何であるのか創造させてみてはどうだろうか。

2) 藍玉の製法過程

①藍葉を刻んでから乾燥させる。

②発酵させる為の小屋の中に①を入れ、水をかけ、筵をかけて蒸らす。九月から十一月にかけて蒸している中、時々切り返し(上下の葉の入れ替え)を行う。次第に練り状に変化していくのが染である。できあがるのは十二月頃のことである。

③染を藍白で搗き固めて藍玉にする。

④搗き上がった藍を玉切鎌で長方形に切る。

⑤莫塵に藍玉を並べ、天日干しにする。そして、全国に出荷するために俵に入れる。

3 藍商

図にある四角い俵(一俵56kg、乾燥後45kg)は、藍を出荷するための入れ物である。その中には藍玉が入れている。現在もこの形態を保ったまま受け継がれているが、先述した通り染の状態となって藍が入っている。

江戸時代、この図のような藍商の蔵から全国へ向けて藍が出荷されていった。「阿波二十五万石、藍五十万石」。阿波藩は藍の産業で繁栄した。それは、全国の特産物の横綱が決定された表に、東の紅花、西の藍と評価されるまで登りつめた。

4 最後に

同町の幼稚園を卒園した児童ならば、親子体験の行事を通して、必ず藍染の経験を持つ。二・三回程度の藍染体験をしている児童もいれば、その土地柄から必ずクラスの数人に初心者が存在する。つまり、藍染めについての認知度に顕著な差がみられる。

事前授業で、藍が染料として成り立つまでの過程を児童たちに教授することも、藍を知る上では大切なことである。だが、『阿波名所図会』の「藍玉」図を用いることで、児童が学習してきたことを踏まえながら、以上のような多角な視点を獲得することができる。

その中で、一般的にも認知されていない「藍玉」への取り組みは、どの生徒へも新しい視点から藍についての授業に取り組むことができるのではないだろうか。